岡山中学生白書

2020年10月 初版第1刷発行

NPO法人だっぴ

〒700-0822
岡山市北区表町1丁目4-64上之町ビル301
dappi@dappi-okayama.com

NPO法人だっぴ 検索

本誌の内容を転記またはコピーして使用される場合は、必ず事前に発行者までご連絡ください。また、本誌のデータを無断で転用・配布するのはご遠慮ください。
発送をご希望の方は、上記までお問合せください。

岡山

中学生白書

2020

キャリア教育プログラムを
実施していく中で調べた
中学生が考えていること

対談 地域のつながりが子どもに与える影響

愛媛大学大学院 教授 露口 健司先生 × NPO法人だっぴ 森分 志学

p.4 NPO法人だっぴとは　p.6 自分自身について　p.8 将来について　p.10 地域について

NPO法人
だっぴ

対談

地域のつながりが子どもに与える影響

NPO だっぴが行っている地域のつながりづくりが、学問の世界でどのように扱われているのか、そこから見えてくる未来はどんなものかについて、露口先生とお話しました。

NPO 法人だっぴ
森分 志学

×

愛媛大学大学院 教授
露口 健司先生

露口健司（愛媛大学大学院・教授）Profile
徳島県阿南市生まれ。九州大学大学院人間環境学府後期博士課程修了（博士（教育学））。九州の私立大学勤務を経て、平成 18 年度より、愛媛大学にて勤務。平成 28 年度より、大学院教育学研究科（教職大学院）教授／教職大学院専攻長。教職員支援機構研究フェローを兼務。日本学校改善学会会長を務める。主な著書は、『ソーシャル・キャピタルで解く現代の教育問題』（ジダイ社・2019）『つながりを深め子どもの成長を促す教育学』（ミネルヴァ書房・2016）等。

子どもを取り巻くつながり

森 先生、本日はよろしくお願いします。さっそくなんですが、つながりの力が子どもにどのような効果・影響を及ぼしているのでしょうか。

露 我々がやっているつながり（ソーシャル・キャピタル）研究は、「つながりづくりが人づくり」ということをベースに調査研究が成り立っています。子どもを取り巻くつながりをつくって、子どもの能力を高め、成長を促進させる研究を行っています。

森 つながりというと、具体的にはどのようなものがあるのでしょうか。

露 子どもを取り巻くつながりにもいくつかのタイプがあります。まずは、家庭の中での親と子どものつながり。2 つ目が、子ども同士。学校の友達同士ですね。3 つ目が、教師と子ども。4 つ目が、見落としがちですが、子どもと地域の大人たちのつながりで、これもとても重要ということが分かってきています。
なるほど！いくつかタイプがあるんですね。

それぞれのタイプについて、教えてください。

露 まずは、家庭における親と子どものつながり。こちらでは、学力や問題行動などに対する検証が世界的に多くなされています。子ども同士のつながりも学力や学習意欲への影響を及ぼします。これらのつながりは、学力などの認知的能力と学習意欲や自己肯定感などの非認知的能力への影響があります。教師と子どもについても同様です。
最後に、子どもと地域の大人たちはこれまでの 3 つと比べて、学力に対する影響は今のところ認められていません。それよりも、非認知的能力の高まりが強くみられています。やる気や自尊感情、自己肯定感の高まりです。我々が行った研究では、地域の大人とのつながりがあると、子どもたちの主観的幸福感が高まることも分かりました。

森 そうなんですね！地域と子どもとのつながりに関して、非認知能力の高まりの他には、何か影響ありそうな要因はあるのでしょうか。

露 まだ今は調査中なのですが、子どもの愛郷心や帰郷心もポイントではないかと。子どもが地域と関わることで、地域を好きになる。お祭りや職場体験などで地域の大人たちと関わる中で、地域のよいところに触れて、それが帰郷心の高まりに効果を発しているのではないかという仮説です。

森 ありがとうございます。そもそもなんですが、つながり研究の中では、どういう状態が「つながっている」とされているんですか。

露 つながりは 3 つのステージに分けられます。まずは、ネットワークの次元。同じ集団に所属している、日常的に何らかの対話・交流がある。ただ、集団に所属してちょっとおしゃべりしているだけでは、つながりは深まっていかないですよね。
2 つ目は、共同活動による互酬性規範です。同じ目標に向かって、子どもを取り巻く人たちが力を合わせて汗をかく。こういう活動を共同活動といいます。だっぴの実践の中でも、中学生と大学生と大人が一緒に活動しているので、共同活動に当たると思いますね。
活動を行うことで、助け・助けられ、支え・支えられが「お互い様よね」という感覚に変わっていくんですね。この現象を互酬性規範と呼びます。共同活動を通して、「お互いさまよね」と言い合える関係が中長期的に続いていくと、信頼関係に変わります。自分が困っているときには周りが助けてくれるだろう、周りが困っていたら自分が助けの手を差し伸べるような安心して生活できるいい状態。やはり、信頼関係をつくるためには共同活動の繰り返しが必要です。
こうした“深まる”ステージと別に、“広がる”という観点もあり、これは人数が多くなっていくことを指します。

子どもと地域のつながり

森 つながりの 4 つのタイプの中で、ここからは「子どもと地域」のつながりについて、詳しく話をしていきたいと思います。

露 子どもが学校外で出会う大人たちは、“つながりのセーフティーネット”になると考えています。例えば、小学生で言えば、放課後児童クラブや子ども食堂など、つながりの中で子どもたちが有意義な時間を過ごせる。その可能性を高める存在です。つながりの中で人は育つ、つながりづくりが人づくりですので、大人に関わる時間は有意義だと思います。そこに登場する大人の人たちは子どもたちのために何かしたいという熱い思いをもっている方が多いので、子どもたちに愛情を注いでくれる気がします。関係は薄いかもしれないですが、子どもたちを褒めてくれたり、温かく関わってくれたりすることが、子どもたちの自信につながっていくと思います。

森 なるほど。地域のつながりというのは、親と子ども、教師と子どものつながりとはまた異なる、それらを補完するようなものですね。

露 その通りですね。学校で上手くいかない、教師と上手くいかない子も、地域のつながりの場（コミュニティ）に入っていくことで、新たなつながりができて、成長の可能性を取り戻せる。重要な場だと思います。

森 その意味では、つながりを深めることと同時に、つながりを広げること、たくさんもっておくことも大切ですよね。

露 そうですね。例えば、土日はスポーツ少年団のコーチとの信頼ができて、そこで（子どもが）変わるという可能性もありますよね。

森 子どもと地域の大人の信頼関係について、それはどのような過程で形成されるものなんでしょうか。

露 地域の人たちは自分たちを守ってくれる信頼できる存在なんだと子どもたちに自覚してもらうことが重要です。では、子どもたちは大人との信頼関係をどのようなプロセスで築いていくのか、私たちはそれについて、仙台市をモデルに調査しました。
子どもが社会を信頼するプロセスは、まず学校に来てくれる 1 人の大人からスタートします。学校での何かしらの活動に地域の人が関わる中で、「このおじちゃんは信頼できる」と子どもたちは自覚します。今度はそのおじちゃんの仲間たちも来ます。あるいは、子どもが地域に出ていって、おじちゃんの仲間たちと関わります。このおじちゃんの仲間たちも信頼できるよね。そして、おじちゃんの仲間からまた交流活動が増えていく。このおじちゃんの仲間たちが住んでるこの地域って、信頼できるよね。
最初は 1 人の大人から始まった信頼が、交流活動の中で広がっていく。そういう仕組みを記述することに成功しました。なので、学校に地域の人が入ってこない、あるいは子どもが地域に出ていかないということでは、子どもの社会信頼の構築は難しいということです。

学校と地域のつながり

森 学校と地域のつながりができている地区では、そうでない地区と比べて、子どもの様子も違うのでしょうか。

露 研究では、自尊感情や学習意欲面に差が出ています。地域が支えている学校の校区に住んでいる人たちは子どもたちを「我らの子ども」として見ています。つながりがバラバラな地域は「私の子ども」しか見ていませんよね。いかに地域の人たちが「我らの子ども」として子どもたちに関われるか。その仕組みをどうやってつくっていくかが課題となっています。

森 その仕組みについて、これから私たちは、地域のつながりをどのようにつくっていくとよいと思われますか。

露 昭和の時代の地域行事はソーシャル・キャピタル蓄積の素晴らしい機能をたくさんもっていました。それが今は、指導者の問題や家庭の多忙化、自治体予算の問題、人口減少の問題などで、どんどん縮小されていっています。つながりづくりの拠点として機能していた様々な行事ごとが縮小していっていることは残念に思います。だからと言って、昔に戻せないわけです。戻せない私たちはどうやってつくっていったらよいのか、今はその岐路にあると思います。

森 現代版のつながりづくりを新たな仕組みで行っていかなければならないということですね。

露 その可能性の 1 つとして、「学校」かなと思っています。例えば、地域行事を地域の方や保護者が部会・分科会をつくって行事を運営していけば、低コスト・高パフォーマンスな行事をつくることができるのではないかと。学校を核としたつながりづくりを期待しています。

森 学校を核とした地域づくりで重要になってくるポイントはどこなんでしょうか。

露 学校を核とした地域づくりは、今の教員の数やマンパワーでは無理です。先生たちは今でさえ多くのことを抱えられているので、そこに地域のつながりづくりまでとなると、倒れてしまいます。そこで、コミュニティリーダーたる人材を育てて、配置していく必要があります。まず、学校の中には地域連携担当。地域の窓口となってネットワークの中心になって、学校の中にたくさんの人を入れたり、子どもが地域に出ていくときの調整を行ったり。さらに、地域サイドには地域コーディネーター。地域の側で協力してくれる大人たちを集めたり、学校からの情報を共有したり。この 2 人のキーパーソンが連携することで、地域でつながりをつくっていくきっかけができます。
今後は、こうしたコミュニティリーダーの養成に、意識と資本を投入していく必要があると思います。

森 まさに、今はその機運が高まっている状態ですね。我々もコミュニティづくりに寄与しながら、学校と社会をつなげていこうと思います。先生、どうもありがとうございました！

露 ありがとうございました。

NPO法人
だっぴ

一人ひとりの若者が人とのつながりの中で自分らしく生きられる社会へ

NPO 法人だっぴでは、「若者の可能性と実現力の開拓」をミッションに、若者と大人がつながる場づくりを行っています。様々な立場の人たちがつながり、学びが生まれるコミュニティをより多くの地域につくっていきます。

世代を超えて学びあえる機会を創出する

だっぴが挑む社会問題と解決ステップ

だっぴの役割

若者
- もっと知りたい！何かやりたい！ → 信頼できる人やロールモデルがいる → 次の一歩を踏み出す！

だっぴの役割
- 多世代交流を起点に若者と大人のつながりをつくる！ → コミュニティづくりによって社会教育力を拡張する → 多様な学びやチャレンジを生み出す

大人
- 中高生と関わり“今”を知る！ → 若者や学校とさらにつながる！ → 地域の教育に関わる一人となる！

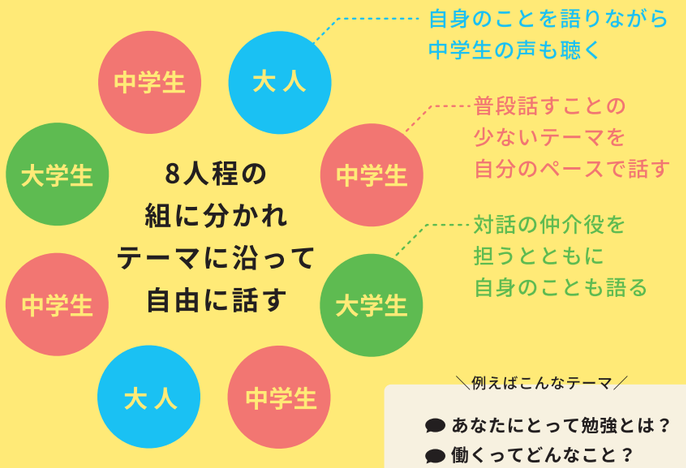
おかやま中学生白書

中学生と向き合い続ける中で感じた意識の変化

NPO 法人だっぴでは、地域の大人と中学生の出会いと対話の場「中学生だっぴ」を実施しています。
平成 31 年・令和元年度の参加校 17 校の生徒を対象に交流の前後にアンケートを実施。
岡山の中学生たちが現在持つ生き方や働き方についての意識を調査しました。

中学生だっぴとは？

地域の大人と中学生、大学生が様々なテーマについてフリップトークする対話の場です。



＼例えばこんなテーマ／
- あなたにとって勉強とは？
- 働くってどんなこと？
- どんな大人になりたい？

アンケート調査対象：平成 31 年・令和 1 年度 中学生だっぴ参加校
n＝1041（中学生 1 年生〜3 年生）※項目によって無回答あり

中学生白書の発行にあたり

中学生白書を手にとってくださり、ありがとうございます。
中学生だっぴのアンケートをもとに、中学生たちの状況を私たちなりにまとめて発信すべく、本書を制作して 3 年目になります。
若者の声を大切にしながら活動を行っている私たちにとって、彼らの現在を伝えていくこともまた重要だと考えています。教育関係者のみならず、多くの方に本書が届くことを願っています。

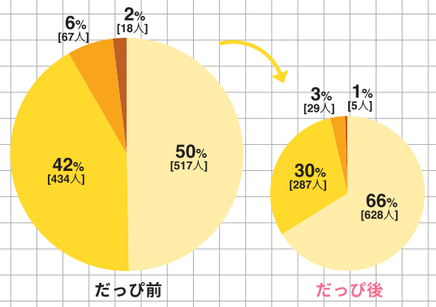
NPO 法人だっぴ
代表理事
森分 志学

中学生の意識

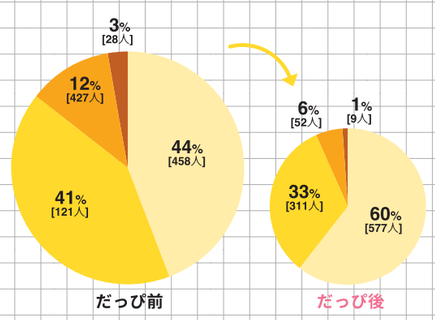
自分自身について

岡山中学生アンケート　とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　全くそう思わない
＊無回答は省く

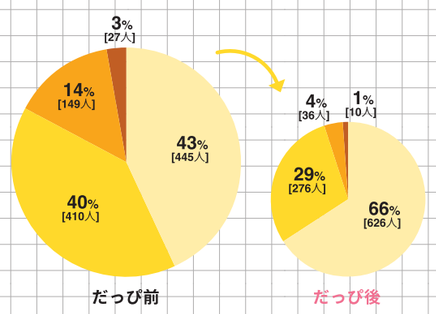
Q.1 自分のことを大切にしようと思う



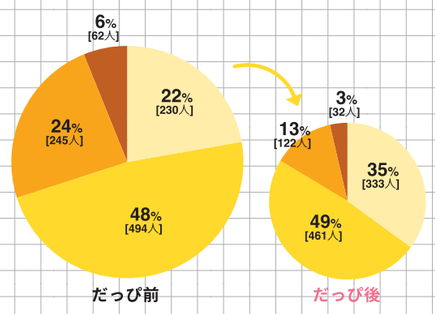
Q.2 積極的に人と関わっていきたい



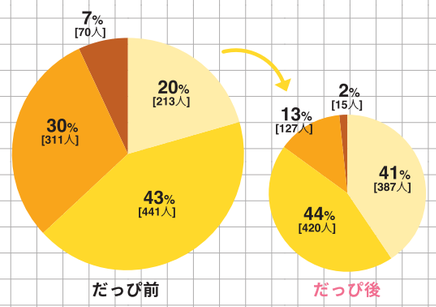
Q.3 たくさんの人の話を聞きたい



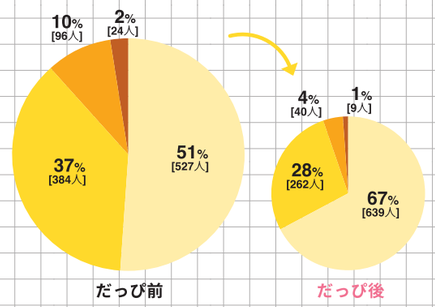
Q.4 私にはよいところがあると思う



Q.5 自分の行動により自分の周囲の状況を少し変えられるかもしれない



Q.6 多くの人の役に立ちたい



少しずつ高まっている?! 自尊感情

「自分のことを大切にしようと思う」の問いに「とてもそう思う」と回答した中学生は 51%と、前年よりも 5 ポイント上昇しました。一方で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」とネガティブな回答をした中学生は 8%と、前年の 9%とほぼ変わらない結果となっています。
「私にはよいところがあると思う」の問いに「とてもそう思う」と回答した中学生は 22%と、前年よりも 6 ポイント上昇しました。一方で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」とネガティブな回答をした中学生は 30%と、前年の 31%とほぼ変わらない結果となっています。

ポジティブ層とネガティブ層の二極化の兆候

この 2 問とも、「まあそう思う」回答者が前年よりも微減するかたちとなっており、その分、よりポジティブな回答者が微増しています。否定的な回答者の割合は前年と変化がないことから、中間層の減少による、ポジティブ層とネガティブ層の二極化の兆候が出ているのかもしれません。同様の傾向は、令和元年版子ども・若者白書【図 1 】にも見られました。「自分自身に満足している」の問いの「そう思う」回答者は 10.4%で、平成 25 年調査時の 7.5%から上昇しています。一方で、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」回答者はそれぞれ 30.8% と 24.2%（計 55.0%）であり、平成 25 年調査時の 31.9%と 22.3%（計 54.2%）から微増しています。

他者と関わろうとする意識の高まり

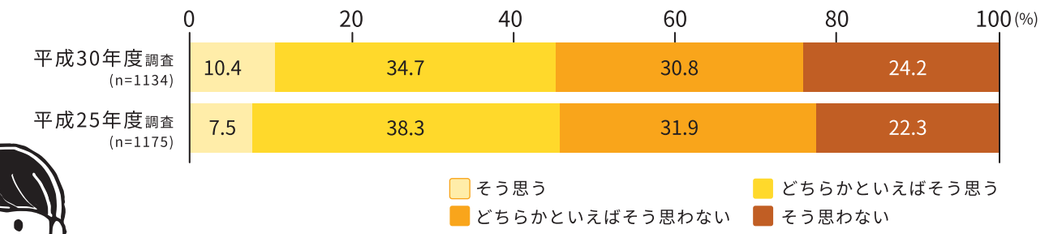
「積極的に人と関わっていきたい」「たくさんの人の話を聞きたい」「多くの人の役に立ちたい」の 3 問とも「とてもそう思う」と回答した中学生は前年より増えています。【図 2 】
多様性が重視されるこれからの社会において、異なる他者との関わり方はとても重要な要素になってくると考えます。そのためにも、自分とは異なる他者との出会いや関わりの機会が、教育課程で整備されていることが求められます。

【図 2】

質問	回答	2018年度	2019年度
Q2 積極的に人と関わっていきたい	とてもそう思う	38%	44%
	まあそう思う	46%	41%
	あまりそう思わない	14%	43%
	全くそう思わない	3%	12%
Q3 たくさんの人の話を聴きたい	とてもそう思う	34%	43%
	まあそう思う	48%	40%
	あまりそう思わない	16%	14%
	全くそう思わない	2%	3%
Q6 多くの人の役に立ちたい	とてもそう思う	46%	51%
	まあそう思う	43%	37%
	あまりそう思わない	8%	10%
	全くそう思わない	3%	2%

【図 1 】内閣府「日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～」より

Q 自分自身に満足している

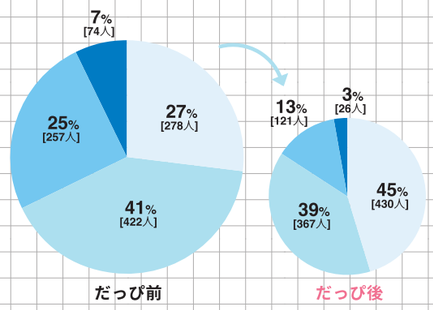


中学生の意識

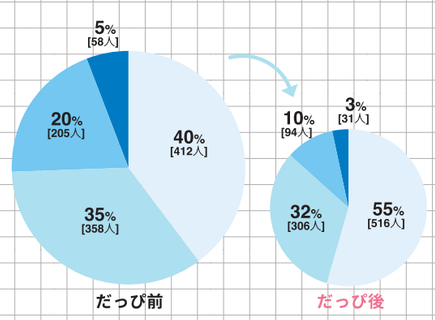
将来について

岡山中学生アンケート　□とてもそう思う　□まあそう思う　□あまりそう思わない　□全くそう思わない
＊無回答は省く

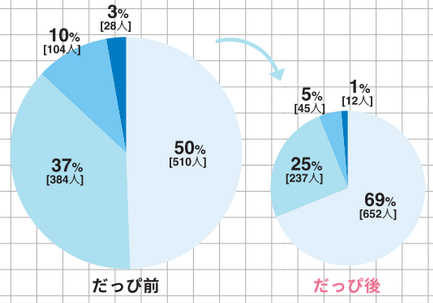
Q.1 自分の将来に希望を持てる



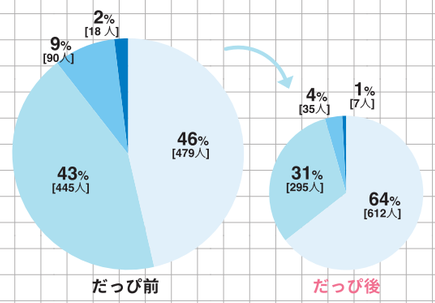
Q.2 大人になるのが楽しみだまたは、働くことが楽しみだ



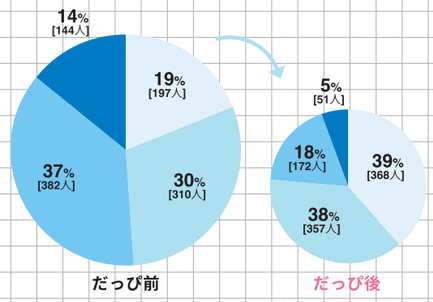
Q.3 自分の未来は自分で動けば変えられると思う

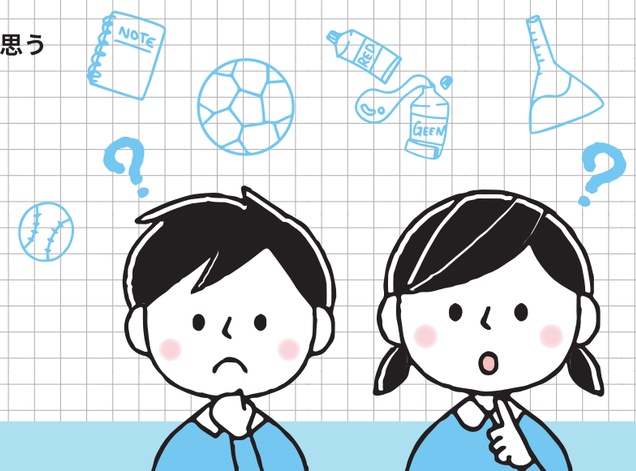


Q.4 より納得した進路選択（生き方）をするために、できることに取り組んでみたいと思う



Q.5 両親や先生以外の大人の人に進路選択について相談したいと思う





自分の将来に期待を持てるかどうか

「自分の将来に希望を持てる」の問いに「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生は 32%（前年は 38%）でした。また、「大人になること・働くことが楽しみだ」の問いに「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生は 25%（前年は 31%）でした。

自分の未来に期待感を持てない中学生がおよそ 3 割程度いることが推察されます。40 人学級でイメージすれば、12 人程度がそうした状態にあると想像されます。

未来の可能性に挑もうとする意思

「自分の未来は自分で働けば変えられると思う」の問いに「とてもそう思う」と回答した中学生は 50%と、前年よりも 8 ポイント上昇しました。また、「より納得した進路選択（生き方）をするために、できることに取り組んでみたいと思う」の問いに「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した中学生は合わせて 89%で、およそ 9 割の中学生が自分の未来の可能性に挑む意思を持っています。一方で、およそ 1 割の中学生はそう思える状態にありません。

また、これらの項目について、高校生の「とてもそう思う」回答者の割合は、中学生と比べて減少傾向にあります。（調査の母数が異なるので、単純比較はできないのですが）

アンケート内容	中学生	高校生
自分の将来に希望を持てる	27%	25%
大人になること・働くことが楽しみだ	40%	24%
自分の未来は自分で働けば変えられると思う	50%	33%
より納得した進路選択（生き方）をするために、できることに取り組んでみたいと思う	46%	35%
両親や先生以外の大人の人に進路選択について相談したいと思う	19%	14%

なぜ自分の未来に挑むことが難しいのか

「より納得した進路選択（生き方）をするために、できることに取り組んでみたいと思う」の問いに「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生が、ほかの問いにどう回答しているのか、クロス集計を行いました。【図３】

「自分の未来は自分で動いても変えられない」の問いへのネガティブ回答者は63%、「自分の将来に希望を持てない」の問いへのネガティブ回答者は 89%でした。未来が変わらないと思っていることも要素として挙げられそうですが、それ以上に、自分の将来に希望が持てないことが影響していると考えられそうです。それは、自分自身への無力感によって未来を諦めるということに加えて、そもそも未来に期待していないがために、取り組むこともないという状態なのかもしれません。

この結果からも、中学生のときから、いきいきと働いたり、多様な豊さかの中で生きる大人の姿を知るような、いくつかのロールモデルを介して将来への希望に触れる機会の必要性が感じられます。

図３　クロス集計（n=180）

		より納得した進路選択（生き方）をするために、できることに取り組んでみたいと思う	
		ポジティブ	ネガティブ
自分の未来は自分で動いても変えられない	ポジティブ	90%	36%
	ネガティブ	8%	63%
自分の将来に希望を持てない	ポジティブ	70%	10%
	ネガティブ	29%	89%

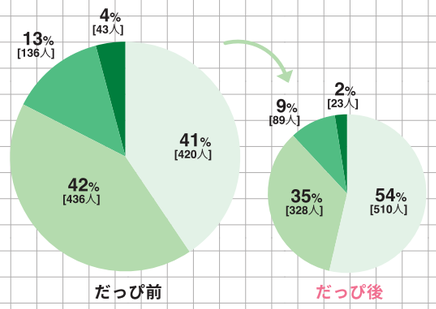
※「とてもそう思う」「まあそう思う」をポジティブ回答として、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」をネガティブ回答として合算

中学生の意識

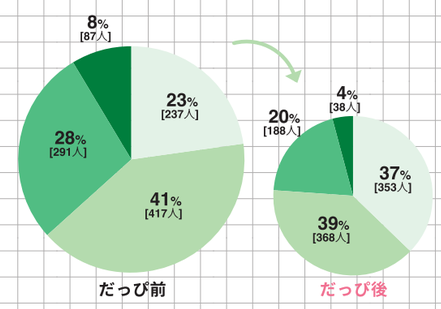
地域について

岡山中学生アンケート　とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　全くそう思わない
＊無回答は省く

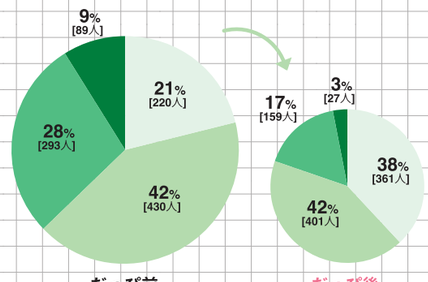
Q.1 住んでいる地域（市町村）が好きだ



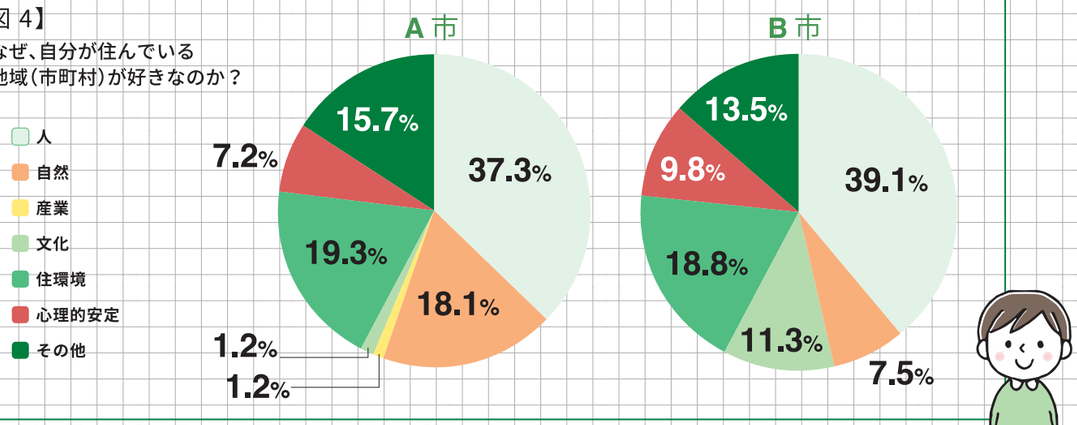
Q.2 地域で起こっている問題や出来事に関心がある



Q.3 地域をよりよくするために何をすべきか考えたいと思う



【図 4】
なぜ、自分が住んでいる地域（市町村）が好きなのか？



※自由記述の回答を上記 6 項目＋その他でラベリングして集計

地域愛着は高まっているか

「私の住んでいる地域（市町村）が好きだ」の問いに「とてもそう思う」と回答した中学生は 41%、「まあそう思う」は 42%でした。程度の差はあると思いますが、およそ 8 割の中学生が自分の地域についてポジティブな感情を持っているようです。「地域で起こっている問題や出来事に関心がある」「地域をよりよくするために、何をするべきか考えたいと思う」の問いに「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した中学生は両問いとも、63%でした。『令和元年版子ども・若者白書』によると、地域の人との関わり方についての問いの全ての項目において、平成 28 年度の調査と比較すると、「そう思う」は増加しており、「どちらかといえばそう思わない」は減少しています。

なぜ自分の地域が好きなのか

「私の住んでいる地域（市町村）が好きだ」の問いに「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した中学生に「なぜそう思うのか」を自由記述で回答してもらい、簡単な分析を行いしました。【図 4】

A 市では、「人が優しい」など人の要素を含む回答（人カテゴリー）が 38%と最も多く、次いで「住みやすい」などの住環境の要素を含む回答（住環境カテゴリー）が 19%という結果になりました。B 市では、人カテゴリーが 39%、住環境カテゴリーが 19%と A 市とほぼ同じ回答割合でした。A 市と B 市で異なる特徴になったのは、A 市では「自然が豊か」などの自然カテゴリーが 18%、B 市では「地域行事が多い」など文化カテゴリーが 11%と、それぞれのまちの在り方や特徴に対する共感が数字に表れる結果となりました。

編集後記

未来への期待は“今この瞬間”からつくられる。

未来は、“今この瞬間”からつくられる。

不確実性の高い現代社会において、未来は模倣するものから自ら創造するものに、以前よりも増して変化しつつあるように思います。画一的なロールモデルは存在せず、自分で自分の未来をつくっていくことが求められています。

そんな現代において、未来への期待をどうつくるか。私は、“今この瞬間”からつくることも大切なのではないかと思っています。ちょっとやってみたい！という自分の興味や関心から、「自分で何かやってみた」チャレンジによって、何かを自分でつくり出す経験と感覚を得ます。“今この瞬間”が直接未来に繋がらなくても、経験と振り返りの蓄積が、自分の未来をポジティブに試行錯誤できる作用を生むのではないかと思っています。

一方で、そのためには当然、子どもたちに“今この瞬間”が訪れなければなりません。その鍵となるのは、子どもたちの学びの環境に “今この瞬間” につながるタネが多様にあるかどうかだと思います。異なる他者との接触によって新しい世界に興味を抱いたり、誰かが背中を押してくれて 1 歩を踏み出せたり、というようなタネです。そのタネは、いつ、何がタネになるかわからない偶発性をもちますが、例えば、つながり（社会関係資本）の豊かさによってその可能性を高めることもできると考えます。子どもたちが多様なつながりをもつためにも、学校や家庭だけでなく、地域社会も一緒になって子どもたちの学びの環境づくりを行っていきたいです。

NPO 法人だっぴ　森分 志学